

魔女物語を超えて

——シュトルムの『レナーテ』と『森水山荘にて』

菅 利恵

はじめに

ヨーロッパ各地で「魔女狩り」が頻発したのは十六世紀から十七世紀半ばくらいまでだったとされる。一五三二年の「カロリナ法典」で定められた「魔女」への処罰は「火刑」だが、魔女かどうかを調べるために川に落とすという方法がとられることもあった。魔女は水に浮くとも考えられていたのである。⁽¹⁾

おびただしい犠牲者を出した魔女狩りも、科学の時代の幕開けとともに下火になる。経験的に共有できることがらにのみ公的な認知を与える姿勢が浸透すると、「空想犯罪」がおおやけの権威を帯びる余地はなくなっていく。一七〇〇年前後から魔女の事実としての信憑性は急速に薄れて、公的な場所で語られるべき対象からはずされてゆく。

場所によっては十八世紀半ばすぎまで魔女裁判も見られたが、各地で法的な整理が進められ、十八世紀末にはヨーロッパの公的領域から撤退することになる⁽²⁾。

入れ替わるようにしてその文学における存在感は肥大した。歴史的な背景を学術的に探る試みも始まる。フェリックス・ヴィーデマンの研究によると、十九世紀におけるその広がりにはおもに二つの方向性がふくまれていたという。一つは啓蒙時代の迷信批判を受け継いだ「理性的」な立場で、魔女信仰や魔女迫害を非理性的な迷信が生んだ厄災とみなすものである。もう一つは「ロマン派的」な方向性で、これは魔女迫害よりも魔女という存在に光を当て、人智を超えた世界とのつながりや、キリスト教以前の民衆文化のなごりをそこに見出そうとするものであった⁽³⁾。

魔女のモチーフを含むシュトルムの小説『レナーテ Renate』（一八七八）と『森水山荘にて Zur "Wald- und Wasserfeste"』（一八七九）は、十九世紀後期に生まれたが、右の二つのどちらにもあてはまらない。ともにシュトルムの故郷フーズムから少し離れたシュヴァープシュテットをインスピレーションの源泉としており、物語の舞台もこの村である。描かれる時代は違っていて、一方は十八世紀前半、もう一方はシュトルムが生きた十九世紀後半の出来事として設定されている⁽⁴⁾。どちらの作品も、魔女自体よりも魔女化の力の方に、つまりだれかを他者として浮き上がらせ、魔女としてしるし付ける社会的な力の方に、もっぱら焦点を当てている。魔女物語が虚構を通して魔女の存在をなまなましく立ち上げるものだとすると、それらは魔女物語というよりもむしろ魔女を存在させるものについての物語、つまり魔女物語についての物語なのだ。魔女化のメカニズムを問題としている点では、どちらかといえば「理性的」な姿勢に近い。ただ、たんなる「非理性」批判ではないし、教会権力を批判しているわけでもない。シュトルムのテクストは、もともと人の生活世界に潜む問題性に深く入り込んでゆく方向性を持つており、まさにその点で注目に値すると思われる。

人の生活世界に潜む問題性、ということにかんしては、あらかじめ少し説明が必要かもしれない。理性と科学の時代にあつて、魔女のモチーフが現実の生活世界と結びつきえたのはいったいどのような文脈においてなのだろうか。

これについて、ここではシルヴィア・フェデリーチの『キャリバンと魔女』をひいておこう。魔女狩りの犠牲者には男性も少なからずいたことが知られるが、多くはやはり女性だった。それは女性により担われてきた活動領域をかき乱して、身体や生産／再生産の営みにたいする女性たちの主体的なコントロールを弱体化させる作用を持ち、「女性」という存在を、規律化された領域の外部として際立たせるものであつた。『キャリバンと魔女』は、魔女狩りのそうした側面が、資本主義経済への変動過程と密接に関係していたことを論じている。すなわち、女性が父権的秩序にとって異質な存在としてしるし付けられ、領有と搾取の客体に押し込められることは、規律化とともに特定の場所や集団が外部化され、その疎外と搾取をとおして資本主義の前提が固められてゆく歴史的な過程の、一環にはかならなかつたという。⁽⁵⁾ フェデリーチはこの疎外構造について、現代と無関係な過去ではなく「いつの時代も資本主義という存在にとって必要条件」なのだとしている。⁽⁶⁾ たしかに、二十世紀後半の第二波フェミニズムや、最近見直しが進むケア理論の文脈でもまさに同様の外部化構造が批判されている事実を考えあわせると、父権的な主体にとって異質とみなしうる対象を「他者」としてしるしづけ、その価値を切り下げ、切り下げながら搾取するという魔女迫害の基本的なメカニズムは、かたちを変えて近代的な産業社会を支え続けてきたといえるだろう。そう考えると、産業社会が急速に広がった十九世紀において、魔女が「克服された過去」以上のリアリティを持ちえたのは当然ともいえる。シュトルムと同時期に活躍し、ドイツ語圏初期フェミニズムの立役者となつたルイーゼ・オットーは、『職業に対する女性の権利』（一八六六）をはじめとするその論考において、市民層や労働者層の女性たちが産業社会の外部や下層に押し込められ、自分で生をコントロールする力を奪われている実態を赤裸々に告発した。⁽⁸⁾ 結婚だけをゴールに設定する女子教育や、女性による労働

の価値を安く見積もる市場のあり方を問題にしたその文章からは、当時、女性疎外の構造が教育や職業領域のすみずみまで浸透していたさまを具体的に知ることができる。

本稿で示したいのは、シュトルムのテキストが、こうした背景とどのように響き合っていたかということである。「魔女」という主題から見たとき、そこにはどのような、またどの程度の批判性を見出すことができるだろうか。以下ではまず『レナーテ』と『森水山荘にて』のあらすじを、それぞれゆくりと追うことにしたい。それとともに、両者のなかで次のような問いが深められるさまを確認する。すなわち、女性を社会的な関係性から切り離し、その生の可能性を狭め、魔女のレッテルを押しつけるような力は、どうやって生まれ、どのように作用するのか。人はこの力にいつ、どんなふうにかからめとられてしまうのか。また人は、この力から、どのようにして逃れることができるのだろうか。

特に注目するのは最後の問いである。先取りして書くならば、魔女のモチーフを含むシュトルムの二つの作品は、「魔女物語」についての物語というだけでなく、これを乗り越える物語ともなっている。以下では二つのあらすじから「乗り越える」という主題を抽出し、その意味や意義を検討することにした。

一・因習から踏み出す

『レナーテ』は一八七七年末に書き始められ、翌年四月に雑誌「ドイチュ・ルントシャオ」で発表された。一八七七年秋に、作者がフーズムとその周辺地域の年代記を読み込んだ成果として生まれており、とくに一八五〇年の民間伝説集に掲載されていた「昔の牧師生活の情景」という文章からあらすじのヒントを得ている。⁽³⁾

シュトルムによく見られる重層的なつくりの物語で、十八世紀の手記が後代の「私」の語りに挟み込まれている。あるとき「私」はシュヴァーブシュテットの村で、昔を知る老婆から、一〇〇年ほど前に住んでいた魔女の話を聞かされる。大きな農家で暮らし、「蒼ざめた顔に大きな燃えるような目」(255)をしていたというこの魔女について、そのときはあまり詳しいことまでわからなかったが、後になって「私」はこの「魔女」のことを書いた古い手記を見つける。そこには、ある女性を愛し、彼女が魔女かもしれないという疑惑にさいなまれた一人の男の回想がつづられていた。

男は十八世紀前半に生きた牧師で、名をヨジアスという。若いころの彼は、敬愛する父親の背中を追って牧師になるべく、ひたむきに勉学に励むまっすぐな青年だった。おりしも科学の夜明けが始まり、聖書における、経験的に広く共有できない部分をどうみるかという問いが、聖職者たちをざわつかせていた。魔術や魔女の現実性を否定したクリスティアン・トマジウスの論文『魔術の罪について De crimine magiae』(一七〇一)も波紋を呼んでおり、大学でもこれに追隨するものたちがあらわれる。しかしヨジアスは、後戻りできない変化の波を感じながらも、父と同じくこの波にあらがう姿勢を固めていた。悪魔や魔女をおそれる昔ながらの信仰の世界こそを、善良で真なるものとみなしていたのである。

レナーテとの出会いはまだ少年の頃だったが、親しくなったのは学生時代に入ってからである。帰省中に、村の結婚式の宴に出たヨジアスは、そこに来ていた彼女と初めてうちとけダンスをする。それは彼にとって言葉であらわせないほどに心躍る喜びだった。レナーテは別の農家の息子から踊りに誘われてこれをはねつけ、村の男たちの反感を買うのだが、たやすく人の言いなりにはならない孤高の風情もヨジアスを魅了し、彼女は彼にとって特別な存在になる。けれども彼女の父親には、農業経営において悪魔に手助けされているという噂があった。実際の交流から、ヨジアスは彼の農場の成功はその優れた手腕のたまものだと理解していたのだが、不穏な噂に無関心ではいられない。レナーテ

は因襲的な村人たちにしばしば強く反発し、それもヨジースには神をもおそれぬ態度に見える。その一方で、レナーテと会うたびに、彼女こそが自分の幸福だという思いもつった。胸の中でレナーテに対する恋心と違和感とがせめぎあう。

故郷から離れて学業を続けていたときに、彼は父親から分厚い手紙を受け取る。そこには、レナーテの父親の不審な失踪と、残されたレナーテについての不穏な目撃情報が記されてあった。手紙の調子から、この親子が悪魔となんらかの結託をしていたことはや疑いえないように思われ、ヨジースは夜も眠れないほどに悩み苦しむ。なんとか学業を終えて故郷に戻るが、教会でレナーテが聖体を口から吐き出したのを目にすると、彼女に対する疑いは確信に変わる。とうとう彼はレナーテに、魔女と決めつける言葉をぶつけてしまった。

それでも、二人の物語は終わりとはならない。あるときヨジースが村はずれの川沿いを歩いていると、農夫の一団がなにかを獣のように追い立てている。「魔女を水に落とすんだ!」(Duff) 追われていたのはほかならぬレナーテで、ヨジースは驚愕する。やめろと叫んでも、彼らは聞く耳を持たない。激昂したヨジースは僧服を脱ぎ捨て、体を張って一団を阻止した。

こうしてヨジースはレナーテを救い出し、レナーテとの距離も縮まるように思われた。しかし結局、二人は結ばれないまま終わる。ヨジースは死に際の父と、そのようなことはけっしてしないと約束していたのである。その後の彼については、ごく手短にまとめられている。彼は故郷から何マイルも離れた村で牧師の職をえて、誠実につとめあげた。ずっと未婚を通し、レナーテとはもう会うこともなかった。

牧師の手記はここまでである。だが語り手の「私」は、この手記のほかにもうひとつ、ヨジースの親戚が彼の思い出をつづった古い文書を見つけ出す。そこには、手記を書き終えてからの、晩年のヨジースの様子が書き記されている。

た。

晩年になってようやく、ヨジースは悪魔や魔女の実在性を明確に否定するようになったという。トマジウスの論文も読んだらしいが、決定的だったのはトマジウスではなく、「突然心に光がふりそそいだ」(p. 22) からだという。さらにこの文章には、亡くなるまでの彼について、奇妙な噂があったことも記されていた。老いたヨジースはもう日曜日の教会に行くこともできなくなった。そんな彼のもとを、みなが教会に出はらった日曜日の午前中に、女が一人、南の方から馬を駆って訪ねてきたという。毎週日曜日、彼が息を引き取るまでやって来たこの女の姿を見たものはだれもないが、噂ではそれは「シュヴァープシュテットの魔女」、レナーテであった。

物語は以上である。ここに描かれているのは、まがましい他者のイメージに生身の人間を押し込める魔女化の力が、たんなる非理性的な偏見というよりも、道徳心にうながされて働くさまであった。そこにはたしかに嫉妬や無知も関係しているのだが、同時に、より善くより正しくあらうとする意志や、自分や集団を平穩に生きのびさせたいという願いもまた、否定しがたく働いている。因襲に縛られている一方で、知的で善良なヨジースの姿は、後者の側面をととても純粹なかたちで表現しているだろう。彼にとって魔女物語は、それが彼の学識と道徳、そしてそれらを導く善の感覚と、かたく結びついているからこそ、簡単に拒否できないものなのだ。このように魔女の問題をたんなる「非理性」として語らないことを通して、ヨジースの物語は、「理性」の時代の人びとも他人事ではない重みを持つものとして明らかにされている。それは社会的な疎外の構造が、理性と道徳と善意のただなかで再生産されてゆくさまこそを、浮かび上がらせているのだ。

それだけではない。ここで力点が置かれているのはそうした再生産の連鎖それ自体ではなく、いつまでも続くように見えたこの連鎖が、きつぱりと断ち切られるその瞬間にほかならない。ヨジースにとって、善と思っていたものが虚

偽であることを受け入れるためには、長い時間が必要であった。そして特定の固定観念に現実の生を押し込めることの暴力性を、彼が理解するためには、良いと信じられていることと、自らの生身の実感が「噛み合わない」という経験を積み重ねることが必要であった。レナーテとの関係は、まさにこの積み重ねの経験として描かれている。固定観念に飲み込まれていたときでも、彼は彼女を獣のように川に追い立てる人々には決然と立ち向かった。獣のように追われているからといって、レナーテ自身が獣ではないことを、それまでの経験を通してよくわかっていたのである。

二、片思いから踏み出す

右に見たように『レナーテ』では、魔女物語に翻弄されながらもこれに飲み込まれなかった人間の姿が語られていた。『レナーテ』発表の翌月から書き始められた『森水山荘にて』も、まったく違う装いではあるが、やはり「飲み込まれない」ことを結末とする物語である。すでにふれたように舞台は『レナーテ』と同じシュヴァープシユテットで、物語が展開する山荘も、『レナーテ』にすでに登場している。トレネー川沿いの丘にあり、『レナーテ』では時代を超えた人びとの憩いの場として描かれたこの山荘は、今もホテルとして実在しているのだが、一八七七年に経営者が一時期かわっており、ちょうどそのころ当地を訪れたシュトルムが、新経営者の一三歳の娘から受けた印象を膨らませて小説にしたのがこの作品である。⁽¹⁰⁾『レナーテ』では、過去の因襲的な時代を舞台として、善意や学識が一人の女性を疎外するように働く状況が描き出されていた。それに対して、そんな因襲がすっかり過去のものとなった時代の物語において、魔女化の力はどのように展開するのだろうか。

ヘルマン・トービウス・チッツベル氏は、広場近くに新規性の強い商店をかまえる意気揚々とした商人である。その一人娘ケッティは、勉強は苦手だが音楽が好きで、自宅に下宿する学生ヴルフ・フェッダースのギターをこっそり拝借して練習していた。小麦色の肌に黒いおさげ髪をたらしこの娘は、やがて学生にギターを教わり、彼に恋心を抱くようになる。しかし学期が終わるとヴルフ・フェッダースは下宿を出、片思いはあつけなく終わる。

いつも新しいことに手を出したくうずうずしている父親チッツベル氏は、トレネー川沿いの丘の山荘を買い取り、この古くからある集いの場を、より有効な富の資源とすべく、がらりと変身させることを思いつく。こうして生まれた「森水山荘」の目玉は夏のハイキングと川遊び、冬のスケート、そして彼が「天才」と見込んだケッティの類まれな歌声であった。けれども斬新で前のめりのチッツベル氏の事業は、ゆつたりとした田舎の風土とうまく噛み合わない。はじめの頃こそにぎわいを見せたものの、次第に客足は鈍化し、ケッティの出演も減る。時間をもてあましたケッティは、善良だがぱっとしない共演者や、いかにも田舎臭い求婚者にほとほと嫌気がさし、あるときとうとう旅芸人の一座について出て行ってしまった。

家出しても華々しい未来は開かなかつたが、一座と流れ着いた街の食堂で、彼女に思いがけない転機が訪れる。初恋の相手、ヴルフ・フェッダースと偶然再会したのだ。法学の道を順調に歩んでいた彼は、昔の下宿先のことなどすっかり忘れており、目下のところその頭は仕上げねばならない論文と、去年の冬に知り合った陸軍少佐のブロードの令嬢のことでいっぱいだった。それでも、ケッティを見るとすぐに昔のことを思い出す。彼女が家出してきたことや、劣悪な環境に置かれていることを知って義憤にかられた彼は、一座とかけあって彼女を保護し、チッツベル氏のところに戻して、そのまま森で夏休みを過ごすことになる。ケッティはあらためて彼に恋をする。

だがヴルフはケッティを恋愛対象として見ていなかった。ちょうど近くの町に例の少佐令嬢が住んでおり、彼女との

関係を深めることに余念がなかったのである。森に滞在する彼を、ケッティは心を込めて世話するけれども、彼の無関心の壁を押し崩すことはできない。ほどなくしてケッティは少佐令嬢の存在を知る。こうして物語の後半では、ケッティの片思いの葛藤がくわしく描かれることになる。

ケッティの片思いの苦しみを、ひとときわ不穏なものにするのが、魔女のモチーフである。あるとき彼女は、いなくなった飼い犬を探して森の奥に住むのっぽのトリーナを訪ねる。女中によると、トリーナは小さな犬を捕まえては殺しており、皮を剥いで肉を薬屋に売ったり、肉で魔法の治療をしているという。こわごわ訪ねてゆくと、森の小屋の壁には板が立てかけられ、そこにさまざまな小動物の皮が干してあった。中には華やかな帽子をかぶった痩せこけた老婆が座っている。彼女トリーナは、ケッティの犬は知らないと言うが、犬を引き寄せておくのに役立つからと、毒紅茸を使った怪しげな魔術をケッティに教える。さらにケッティの心を見透かしたようにその耳に囁きこんだところによると、毒紅茸は犬だけでなく、氣の多い男にも効果てきめんだという。初対面の老婆に自分の悩みと焦燥感を言い当てられ、さらにこの悩みを解消する危険な方法まで伝授されて、ケッティの心は大いに掻き乱される。帰り道、嫌な考えにとりつかれた彼女は、追いついてられるように森をさまよったあげく、いつのまにか湿ったシダの茂みの奥に朱色の茸を見つけ出していた。

うめき声のような音が唇から漏れた。ケッティは悪い幻から逃れるように目を閉じた。けれども再び目を開けると、そこにはやはり茸があり、小さな鉢植え植物のように赤い泡を彼女に向けて見せていた。そんなつもりはなかったのに、彼女はしゃがみ込んでしまった。頭ではこう叫んでいた…「毒、毒なんて、危険すぎる！」けれども胸は嵐のように脈打ち、こう応えるのだった…「危ないからこそ効くんだよ！」(2, 620)

こうして彼女は魔女物語にほとんど取り込まれそうになる。しかし、朱色の茸に手をのばしそうになったそのときに、森に冷たい夕風が流れ込む。通り雨で草木がいつせいにざわめき、彼女はそれでなんとかわれにかえったのだった。

この作品において、魔女物語は人の道徳的なよりどころなどではなく、ロマンティックな美化の対象でもなく、ただ人の心をざわつかせる、悪い誘惑のようなものとして存在している。誘惑それ自体はまったく魅力的に描かれてはならず、奇妙な変わり者として強調されたのっぽのトリーナに、ケッティは異様さしか感じない。にもかかわらず彼女が時代錯誤の魔女物語にひかれたのは、ひとえにヴルフへの報われない思いのせいであつた。ここで特徴的なのは、この報われなさについて、社会的な背景がかなり詳細に書き込まれていることである。ヴルフがケッティの気持ちに応えないのは、もちろんブロンドの少佐令嬢と、彼自身の鈍感さのためなのだが、どちらもかならずしも自然なものではなく、人生についての彼の計画と深く結びついていた。つまり、いつか特権的な地位に上り詰めることを志す野心家の彼にとって、ケッティはふさわしい相手ではなく、あくまでも「大家の娘」という他人行儀な距離感で接するべき存在だったのである。ヴルフのそんな姿勢の背景として、ここでは旧家の令嬢と高級官僚の息子として生まれた彼の生い立ちも語られる。結婚によって身分的な特権を失った母親を見て育った彼にとって、「その出自や生い立ちを考えずに人を評価する」というのは「およそ難しく、ほとんど無理なこと」だった。(199) ギムナジウムの八年生としてチィッペル氏の家に下宿していた頃から、ヴルフはケッティにしばしば不思議な魅力を感じていた。けれどもそのつど、この魅力にうっかり侵食されないように、自らを厳しく律している。令嬢との恋も彼の鈍感さも、彼にとっては、人生の基本方針と相容れない誘惑から身を守るためのいわば砦なのだった。

こうしてヴルフの階級的なとらわれが、その生い立ちから語り起こして詳細に説明されることで、ケッティの情熱を

阻むものの社会的な実態が浮き彫りにされてゆく。少女の胸にとる憧れに水をさし、そののびのびとした羽ばたきを抑え込む圧迫の出所は、少佐令嬢というよりもむしろ、社会の階層構造なのだ。そのことは、音楽をめぐるエピソードともかわっている。もともと彼女において、より良い未来を夢見る憧れは、もっぱら音楽を通して表現されていた。けれども、この道を思うままに突き進むことは難しい。なぜなら彼女の音楽は、森水山荘に人を呼び込もうとする父親の野心と直接結び付けられているからである。父親は娘の才能を喜び、その歌声に心から感嘆するのだが、彼の陽気な起業家精神は、自らの感嘆をことごとく素晴らしい商売のアイディアにつなげてしまう。彼女の歌は、彼女自身の生の可能性を表現するものではなく、利潤もたらす元手にすぐさま読み替えられてしまうのだ。小さな妖精のような彼女の個性的な美しさにも、似たような読み替えが起こる。彼女が家出して飛び込んだ旅回り芸人の世界では、その美しさも若さも、あわよくば簡単に搾取することができ、また太い客をひきよせることのできる金儲けの道具でしかない。音楽の才能も、みずみずしい若さも、彼女が人びとのあいだに確かな居場所を押し開くための助けにはならない。よくある片思いの物語を通して、ここでは、一人の少女に内包された可能性の芽が、すべて便利な搾取対象に読み替えられてしまう実態が浮かび上がっている。

魔女になるようにとケッティを駆り立てたのは、恋の行き詰まりだった。しかし彼女の行き詰まりは、右に見たように、つまるところ彼女の社会的な無力さに起因している。だからこそ、その片思いの痛みは、「見くびられ、いないこととにされた」(623)という苦い認識にそのまま結びついたのだろう。苦い認識は孤独を呼び、孤独は容易に魔女物語と共鳴する。物語の終盤で、彼女は魔女さながらにヴルフを森の奥へと誘い込む。少女の心の葛藤を夢にも知らない彼も、不安定な彼女の姿について引き込まれて、ケッティに手を伸ばしそうになる。けれども善良なケッティは、彼の混乱を利用するほどにしたたかではなかった。ヴルフはすぐにわれにかえり、二人の隔たりは解消されないまま終わる。

最後にケッティは、二度目の家出を決行する。片思いに見切りをつけるその決断をうながしたのは、もちろん、ヴルフと少佐令嬢がめでたく結ばれるところを目撃したことなのだが、おそらくそれだけでなかった。彼女は名付け親だった女性の遺産を思いがけず相続して、ささやかながらも経済的な力を手にしたのである。家出に際して実際に持ち出されたのは硬貨がいっぱい詰まった小袋だけだった。それでも、少なくとも無一文ではないという事実は、彼女の一步を後押ししたにちがいない。

魔女という観点から見るとすれば、この作品は、一人の少女が魔女にかぎりなく近づき、それでも魔女にならなかった成り行きを描いたものとしてとらえることができる。魔女物語に押しやられる少女の姿を通して、少女の可能性を世間の物差しや利潤の論理であしらい、搾取の構造に押し込めてしまう圧力が浮き彫りにされている。魔女物語はここでは、閉塞にあえぐ少女を引き寄せる、まやかしの可能性こそを表現しているのだ。そして『レナーテ』と同じく、ここでも重要なのはやはり、このまやかしが持つ威力それ自体よりもむしろ、この力がけつして万能ではない、という事実にはかならない。ケッティは結局魔女にならなかったし、魔女物語からも、絶望的な恋からも、自力で逃げ出すことができた。逃げ出した先に、どんな未来が待ちうけているのかはわからない。一度目の家出の顛末を見ても、それほど樂觀的ではいられないだろう。結局彼女は、彼女を疎外するものもの力によって、完全に物語の外に追いやられたと言えなくもない。ただ、打たれ強い彼女の父親が、娘の失踪について落胆しつつも語った次の言葉は、彼女の未来にまんざら希望がないわけでもないことを示唆している。「しかしやっぱり、うちのケッティは天才ですわ。ちゃんととるべきものを取ったってわけで」。(p.66) ケッティには素晴らしい歌の才能と、きわどいところで自分を見失わない芯の強さ、そして硬貨いっぱい袋がある。運だめしの旅立ちにあたって、彼女が手にしているカードはけつして悪くはないのだ。

庶民の娘と育ちの良い学生との感情的なもつれというのは、もっと初期に近いころに書かれた短編『大学時代』¹³

der Universität」(一八六三)でもあつかわれている。ここでは貧しい仕立屋の娘が良家の子どものためのダンス教室に行き、豊かな子どもたちと自分との落差を知って消しがたい焦燥感を抱え込む。彼女が不幸を予感しながらも、ある酷薄な貴族の大学生に身をゆだねてしまった背景には、この焦燥感があった。物語の終盤では、この酷薄な学生が主催するいかがわしいダンス・パーティーが森で開かれる。「魔女の安息日 Zum Hexensabbat」(578)と呼ばれるこの学生パーティーにやってくる女性は、良家の令嬢ではなく、「手仕事でわずかな食い扶持を得ている」(1, 179)身寄りのない者たちである。楽しいダンスへの期待と、社会的上昇への憧れを胸に抱いた彼女らは、働いてためたわずかなお金で精一杯着飾っており、それは語り手の目から見てもなかなか美しかったのだが、しかし、その場の学生たちは彼女らを、おそらく自分と同じ階層の女性にはけっしてしないような粗野なやり方であつかう。ここでも魔女のイメージは、社会的な可能性を押し広げようとする女性たちを引き寄せる、まやかしの可能性こそを表現しているのだ。それがまやかしのなは、この誘いの先に待ち受けているものが、結局のところ社会的格差を利用した搾取の一形態でしかないからである。魔女物語は女性を別世界のまやかして誘い込み、そのうえで、まともに交渉する必要のない、簡単に搾取してかまわない他者の檻に閉じ込めてしまうのである。

すでに見たように『森水山荘にて』でも、魔女は現状の閉塞にもがく者の前にあらわれた危うい幻影を表現していた。いつわりの可能性をちらつかせながら、魔女という危険で便利な他者像に人を押し込めようとする力は、ここでは片思いの焦燥感と合流して、少女につよく作用していた。だが『レナーテ』と同じく、最終的に光が当てられているのはそんな魔女化の磁力よりもむしろ、これに飲み込まれず逃れ出る姿の方だった。『大学時代』の仕立屋の娘が、他者化の構造に自ら身をゆだねて結局川に身を投げてしまったことを考えると、『森水山荘にて』でしぶとく逃げのびたケッティの像には、閉塞の打破へと向かう方向性を、より明確に読み取ることができるだろう。

『大学時代』は、魔女物語の悲劇性を前面に出したことで、結果的にその逃れがたさを際立たせるかたちとなっていた。同時代の作家による作品で、こうした構図がさらに明確である例として、劇作家フリードリヒ・ヘッベルの『アグネス・ベルナウア Agnes Bernauer』（一八五一）にも少し目を向けておこう。この作品は十五世紀はじめの事件を題材としている。アウクスブルクで評判の美女だった湯屋の娘アグネスは、ミュンヘンのエルンスト公の子息アルブレヒトにみそめられる。アルブレヒトは父親の公の意向を無視して秘密裏に結婚し、二人はドナウ川のほとりの小さな城で暮らしはじめた。けれども、その後彼のほかに一家の血筋を継ぐものがないとなると、公はこの状況を放置できないと考える。かくして陰謀が進められ、アルブレヒトの留守を狙ってアグネスは魔女疑惑で逮捕される。アルブレヒトと別れるならば助けてやると言われるが、アグネスはこれを拒否し、ドナウ川に突き落とされて溺死する。

ヘッベルのこの作品でも、描かれているのは魔女ではなく魔女物語、つまり誰かを魔女に仕立てあげる人為的な力である。魔女自体はいないまま、だれかを魔女へと押しやる力がその場を支配する、そんな状況が、ここではシュトルムとは別のかたちで描き出されている。ヘッベルの作品に特徴的なのは、この魔女化の人為的な実態が、政治的な策略として描かれていることだろう。生身の女性を魔女に仕立て上げてその命を奪う残酷な過程は、迷信や道徳心よりも政治的な思惑のなせるわざとして明らかにされているのだ。そしてシュトルム作品と決定的に違うのは、この魔女化の力が、たしかに理不尽で不条理ではあるけれども、やむをえない、歴史の必要悪のようなものとして位置付けられていることである。アグネスが魔女であることにされたのは、殺してもよい存在として彼女をしるしづけることに、政治的な必要性があったからである。ここではこの必要性が、たんなるご都合主義ではない歴史の必然として語られ、それによって魔女化の悲劇は、黙って飲み下さねばならない苦い運命のようなものに姿を変えている。劇の冒頭ではアグネスの美しさがそれ自体不可解な魔力のように人を惑わせるさまが描かれており、あたかも不条理なのは魔女物語ではなく彼女

自身の美であるかのようだ。ヘッベルがもつと駆け出しのところに書いた市民悲劇『マリア・マグダレーネ』（一八四四）には、経済的な自由化が進み競争原理を剥き出しにし始めた十九世紀半ばを舞台として、利己的な自己保身に走る男たちと、そのなかで疎外されてゆく少女の姿が描かれていた。軽んじられても仕方がない他者へと彼女を押しやる圧力は、そこでは理不尽なものとして批判的に浮き彫りにされていた。しかし『アグネス・ベルナウア』ではそうした批判性は弱められており、男たちの自己正当化と自己保存に「歴史」という高次の意味がかぶせられて、女性を疎外する構造が、それ自体現世の批判を超越した運命のようなおもむきを与えられている。

そんな『アグネス・ベルナウア』とはちがって、『森水山荘にて』でも先の『レナーテ』でも、理不尽な虚構として浮き上がった魔女物語は変えられない運命などではなかった。それらが描いていたのは、魔女物語との意識的な対決というよりもむしろ、人が無意識的な選択によってこれから離れてゆく姿である。なにかのはずみや、ふとした偶然の積み重ねをとおして人の「心に光が降り注ぐ」、その入り組んだ過程にこそ焦点が当てられている。胸に蓄積される違和感や焦燥感、疑い、執着、さらに見通しがたい外的要因との絶えまない相互作用のなかにあって、人はいつのまにか、規範的な魔女物語とは別の物語を生き始めるのだ。その複雑な紆余曲折の軌跡は、それ自体、既存の社会的な枠組みが必ずしも絶対ではないことを暴き出しており、だからこそ批判的な可能性を秘めている。シュトルムの短編は、まさにそのような物語としてとらえることができる。

『森水山荘にて』ではケッティ失踪の短い後日談として、平凡な役人となったヴルフの姿が描かれている。社会はひとりの少女を視界の外に追いやって、まるでなにごとでもなかったかのように続いてゆくのだ。それでも、その見かけの唯一性と永続性は、どこか目の届かないところでせつせと別の物語をつむいでいる少女のイメージを通して、すでに否定されているのである。

三、家庭的な包摂から踏み出す

一九六八年ニューヨークの路上で「あたしたちは魔女だ」と宣言したフェミニスト集団「W.I.T.C.H.」を皮切りにして、「魔女」はフェミニズムのデモやパフォーマンスに積極的に活用され続けてきた。そこでは「魔女」は、既存の支配構造や過去の犠牲を果敢に告発し、エコロジーやスピリチュアル志向とも共鳴しながら挑発的な生を鼓舞する。「魔女」をあえて引き受けることが、そのままエンパワメントの一形式ともなっているのだ^[1]。もちろんそうしたフェミニズム的な魔女実践にも問題はあるのかもしれない。「他者」であることを引き受けるそのふるまいは、必然的に、他者化の構造を自ら固定化させてしまうものでもあるからだ。それでも、疎外と他者化の力が現に存在する以上、巧妙に隠されているそれらを明るみに出し、キツチュに読み替えながら晒しものにすることは、やはりラディカルな意味を持っている。

本稿ではここまで、『レナーテ』と『森水山荘にて』のあらずじから、「魔女物語を乗り越える」という主題を抽出してきた。先に見たようにこの主題は、魔女化の構造を逃れたい悲劇として強調した『大学時代』や、あらがいがたい歴史として描いた『アグネス・ベルナウア』と比べると、同じ構造を絶対でも不変でもないものとして明らかにしている点で、革新的な意味を持っている。だが、異端的なアイコンをあえて肯定的に提示しなおす現代の挑発的な「魔女」たちと並べてみると、どうだろうか。抒情的なシュトルムのテキストは、批判的というよりもむしろ穏健であるように見えてくる。少女たちを「魔女」の磁場から遠ざけようとするその基本姿勢は、慎重で、パターナルとさえいえるのか

もしれない。

そもそも、批判的なようであるが、保守的にも見えるということは、シュトルム文学全体の特徴でもあるだろう。⁽¹⁾ではこの二つの側面は、どのようにつながっているのだろうか。これと関連して、ここで思い起こしておきたいのは、シュトルムの作品に、家父長的な性別役割をそのままなぞるような調子が随所にみられることである。たいていの場合、家計をになう男性と彼を支える女性という枠組みが守られており、導き庇護する男性と、庇護される女性という構図も繰り返されている。彼の魔女像は、そうした保守的な側面と、いったいどのように結びついているのだろうか。

二〇一七年の国際コロキウムにもとづく論集『因襲と禁忌破り』では、シュトルム文学における「境界」や「タブー」の重要性に光が当てられ、モチーフやメディアなど多角的な視点から論じられている。⁽²⁾たしかに彼の作品では、現実と非現実、秩序の内側と外側、町なかと郊外の森など、さまざまな二者の境界やこれを踏み越えることに、特別な関心が向けられている。魔女のモチーフも、「境界」への問題意識を物語る一つとしてとらえることができるだろう。そもそも、「垣根[lang]」の意味を含むとされる「魔女Hexe」は、境界上の存在を意味する観念である。シュトルムにおいて魔女のイメージは、「社会的にまっとうな生」の境界から押し出されそうな女性たちと結び付けられており、そうした境界のありかたや、境界の外に出ることの意味を問い直す媒体として機能している。

ただ、数多いシュトルムの短編を見渡すと、「境界上の女性」は、魔女イメージとはむしろ無関係なところで描かれていることが多い。すなわち彼の作品には繰り返し、家族も財産もなくしていまにも「境界」からはみ出しそうな女性たちが、きわめて印象的に登場するのだ。この「身寄りのない女性」のモチーフは、魔女のモチーフと、どのような関係性にあるだろうか。

女性の居場所を問題にし続けたシュトルムの作品群には、当時の女性に与えられた社会的な権利の弱さ、つまり生き

るための物質的基盤へのアクセスが男性よりも格段に悪く、夫や父親の庇護を失えば容易に行き詰まるというその不安定さに対する、継続的な問題意識を読み取ることができらるだろう。その点ではシュトルムは、最初にふれた女性運動家ルイーゼ・オットーとまったく同じなのだ。ただ、彼はこの問題意識を、後者のように女性の社会的な権利要求には発展させなかった。そのかわりによく見られるのが、結婚や家長の意向により身寄りのない女性が居場所を見つけないという流れである。『人形つかいのポーレ Pole Poppenspäler』（一八七四）や『管財人カルステン Carsten Curator』（一八七八）では、行き場を失いかけた女性が結婚を通して救われるかたちとなる。『従兄弟クリスティアンの家』(Beim Vetter Christian)（一八七四）に登場するドロテアおはさんは、自分が幼少期から育て上げた坊ちゃんの家に、その家事能力とたぐいまれな押し強さで終の住処を確保する。『キルヒ父子 Hans und Heinz Kirch』（一八八二）のヴィーブや、『白馬の騎手 Der Schimmelreiter』（一八八八）のトリン・ヤンスのように、一家となんらかの因縁があつて最終的に家庭に迎えられる場合もある。

このようなエピソードにおいては、家長に率いられた家庭が、法律や職業の領域とも、またなんらかの価値意識で染められた「世間」とも異なる、より包摂的な場所として浮かび上がっている。つまり、公的な領域において逸脱的なしるしを帯びてしまう存在形態を、柔軟に受け入れうる場所として強調されているのだ。十九世紀の性別役割の観念は、私的な家庭領域に女性性を、公的領域に男性性を割り当てるものだったが、シュトルムの場合、私的な家庭領域における男性の存在感がよい。そして家長となる男性が、立場が不安定な女性を家庭的な包摂の対象にし、それを通して家庭の境界が柔らかく拡張するさまが描かれるのである。

このようにシュトルムにおいては、「身寄りのない女性」のモチーフがしばしば「家庭への包摂」の物語につながられている。ただ、家長の一存に頼ったこの包摂物語は、見過ごせない難点を含んでいるだろう。これについてはシュト

ルム自身の作品で明らかにされている。『森蔭莊物語 Waldwinkeln』（一八七四）では中年の紳士が身寄りのない少女の庇護者となって人里離れた森の家で暮らす。二人はやがて恋人同士のようになるのだが、安定しないまま不穏な破局を迎える。『管財人カルステン』では、行き場をなくした少女が財産整理にやってきたカルステンの求婚を受け入れるが、彼女の奔放な性質は生真面目な彼とは全く相容れないものだった。出産時に彼女は命を落とすが、生まれた息子は母親からその美貌と愚かさを受け継いでおり、父親カルステンを苦しめることになる。どちらの作品においても、「庇護」に恋愛がからんでくるのだが、情熱的なのはもっぱら庇護者の男性側である。少女たちは、嫌がってはいないものの、相手を一途に思っているふうでもない。そもそも行き場のない少女の側に実質的な拒否権はなく、両者の社会的権利にはあまりにも大きな開きがある。そのため男性の求愛には搾取的な側面が否めず、それが二人の関係性に影を落とすことになるのである。シュトルムにおいては、こうして男性による包摂が裏目に出るような事態があつかわれても、「庇護」の家父長的な構造や、少女を無力な立場に置く社会のあり方そのものがまっすぐに問い直されるわけではない。当事者の少女たちはことさらに蠱惑的な「魔性の女」の風情で描かれており、それによって不幸の責任の多くが彼女らにかぶせられてしまうのだ。

女性が家長の管理からこぼれ落ちると、安定した居場所を失い、そのまま「他者」に押しやられかねない社会にあつて、居場所を失った女性の生をどのように考えるのか。右に見たように多くのシュトルム作品では、この問いに応えるようにして、家長ひきいる家庭の枠組みを押し広げ、柔軟に拡張させるかたちが繰り返されていた。しかし、そうして家父長的な家庭を管理よりも包摂の場として強調しても、包摂それ自体が搾取的なものになり、不協和音を呼び込む事態は起こりうる。シュトルムの作品でもこの問題は見過ごされておらず、明確に可視化されてもいるのだが、しかし、女性を依存的な立場に追いやる社会構造が直接問い直されないために、問題を解きほぐすための視点は見つからないま

まとなっている。家父長的な構造をあくまでも維持する「家庭への包摂」の物語は、それ自体が見えない境界に縛られているのだ。

魔女のモチーフは、そのような窮屈さに対する、テクスト間におけるある種の反発としてとらえることができるだろう。『レナーテ』において、ヨジーアスが去ったあとのレナーテがどうなったのかはよくわからないが、相変わらず村人から異端視されたまま暮らし、結婚して新たな家族を持つことはなかったようである。杵物語の語り手にレナーテの話を伝えた老婆によると、彼女は「しっかりと農場を経営する」「とても有力な農場主」(J. 225)であったという。そしてヨジーアスの晩年になると、日曜日ごとに「荒野と湿地をこえて」(J. 225)馬を北へと走らせた。父を亡くしてから彼女は、最後まで家父長的な家庭に包摂されないまま、その外側で見事に生きてみせたのだ。『森水山荘にて』のケッティについては、父を捨てて飛び出した後の彼女がどのように生きたのかはまったくわからない。ただ、先にも書いたように彼女はたしかな才能を持っているので、その未来が明るい可能性も十分にある。

レナーテには父の財産があり、ケッティには硬貨の詰まった袋があった。つまり彼女たちには、生きのびるための物質的な力がそれなりに与えられていた。この例外的な幸運を武器にして、彼女らは、魔女物語だけでなく「家庭への包摂」の物語からも、飛び出している。それによって、後者の物語もまた絶対ではないという事実を、明確に浮かび上がらせているのだ。規範的な物語をさまざまにゆさぶり、その唯一性や絶対性を成り立ちえなくする彼女らの像は、境界の「外」から境界をゆさぶるという意味で、やはり、現代の魔女たちとも無関係ではないのかもしれない。

おわりに——「みとり」のモチーフから見えるもの

境界とのかかわりでいまひとつ重要と思われるモチーフに、生と死の境を見守る「みとり」ということがある。シュトルムが繰り返しさまざまなバリエーションで描いたこのモチーフは、「身寄りのない女性」のモチーフとも密接に結びついており、身寄りのない女性はいしばし迎え入れられた一家で「みとる」人になり、あるいは「みとられる」人になる。『キルヒ父子』のヴィープは、家長キルヒの老いによりそう役割を引き受ける。『白馬の騎手』のトリン・ヤンスは、包摂されたハイエン一家で自分自身がみとられる。『管財人カルステン』の主人公は、身寄りのない少女との結婚で生まれた息子の愚かさのために苦しめられていたが、家に引き取って育てていた別の孤児の少女がこの息子と結ばれて自分の娘となり、最後は彼女と孫のそばで老後をすごすことになる。『管財人カルステン』は次のような文章で締めくくられている。

持っていたすべてのものからひとつだけ、最後を迎える哀れな身に枕をあててくれる慈悲深い手が残ったという人も、やはり幸いなのである。(2, 122)

ここにはシュトルム作品において「みとり」に与えられた重みがよくあらわれているだろう。人生の最後をどのように迎えるかということが、そこでは決定的に重要なのだ。一八八六年に発表され、元懲役囚のむごたらしい運命を描いた『ドッペルゲンガー Ein Doppelgänger』の脇役に、マリケンという老婆がいる。夫を亡くしてからみるみる貧しくなり、かつての雇用者や知人の台所をまわって夕食を分けてもらう「スूप行脚」をして暮らす彼女は、なけなしの金を肌身

離さず身につけているのだが、それは彼女の葬式代にあてるべきものだった。身寄りがなく、住む家も不安定な彼女にとって、どこで死を迎えてもきちんと弔ってもらえると思うことだけが、心の支えだったのだ。だれでもいつかは生死の境界を越えなければならず、そうなるとう自分自分の面倒をみることはできない。家長が家庭の境界をあえて押し広げてよそのの女性を受け入れるのは、家長もまた最後には誰かにみとってもらわねばならないからなのかもしれない。

シュトルムが描く家長は、庇護者としてふるまうからといって、かならずしも強い存在ではない。むしろ自らの弱さをさまざまに露呈させていることこそが、その大きな特徴であろう。⁽¹⁴⁾とりわけ後期作品に登場する父親たち、たとえばハンス・キルヒやカルステンなどは、強引で短絡的なところがあり、意固地で世の変化にうまく対応できず、子育ても夫婦関係もうまくいかない。そんな彼らの弱さ、不完全さ、脆弱さは、彼らもまた「みとり」を必要とするという一点に集約されている。もちろん彼らは家長の地位にしっかりと守られているのだから、生の弱さと不安定さがむき出しになっっているその度合いで言うならば、「スーパ行脚」のマリケンとは比べものにならない。ただ、どのような立場にしろとも、一人で生きることができないのは誰でも同じであり、自分の身体が自分のものではなくなるそのときに、誰かの世話になるという「みとり」のモチーフは、「依存」という生の核心を、なによりもよく明らかにする。「依存」を浮かび上がらせたシュトルムの作品において、身寄りのない女性の包摂は、一方的な包摂というよりはむしろ、相互依存的なつながりの新たな始まりとして浮かび上がっている。

「家庭への包摂」は、それが弱いものどうしの相互依存、相互扶助としてあらわになるときにのみ、搾取の色を薄めることができる。シュトルムによる包摂の物語は、相互依存的なものを前面に出すことで、搾取的な構造の表面化を巧みにまぬがれている部分もあるだろう。その意味でそれは、ヒエラルヒー構造を温存する巧妙な語りだと言えなくもな

い。そもそも、立場が違うものどうしの共通項をあえて際立たせることは、両者に与えられた社会的権利の違いを問わないならば、格差を糊塗する欺瞞にしかならない。それでも、両者の相互依存的な実態を目に見えるものにすることは、ヒエラルヒー構造を無効化するための決定的な一歩ではある。さらにそれは、世間的な先入観による境界を無効にするための一歩でもあるだろう。『人形使いのポーレ』のリーザイは、市民社会では疎外の対象となる旅回り一座の娘であったし、『白馬の騎手』のトリン・ヤンスも、魔女のように排斥されてもおかしくはない孤独で無力な老婆であった。そのように逸脱的な存在が家庭に居場所を与えられることで、相互依存的なつながりが広げられ、結果として、よりよい生への権利をめぐる線引きに、風穴があげられるのである。

繰り返しになるが、シュトルムのテクストは、女性が男性に経済的に従属せねば生きていけないような構造を積極的に変えようとはしていない。その意味でそれは、教育や職業領域の改善を通して具体的な変革をもくろんだルーイーゼ・オットーの言説とは対照的である。とはいえ、そこに現状を乗り越えるための独自の模索を読み取ることは可能だろう。彼の作品において家庭のうちの相互依存的なものが可視化され、それとともに家庭の枠組みが持続的に、確実に押し広げられているさまは、やはり注目に値する。

家庭という枠組みの外側で生きたレナーテは、馬を走らせて遠くに住むヨジアスの老いによりそい、彼をみるという離れわざをやつてのけた。彼女自身がどのようにみとられたのかはわからない。完全に読者の視界から姿を消したケッティについても、その後のことはまったくわからない。「みとり」のモチーフについても、彼女たちは例外的な存在だろう。しかし右に見たように、そもそも例外的な存在を許容し、例外を柔軟に取り込むかたちで相互依存的なつながりを広げてゆくというのが、シュトルムの作品世界の特徴であった。魔女物語からすり抜け、「家庭への包摂」の物語からも抜け出した例外的な女性たちは、そうした柔軟さこそを土壤にして育まれた批判性の形象化であるだろう。

註

- (1) ヨーロッパの魔女狩りについては主に以下を参照。池上俊一『魔女狩りのヨーロッパ史』、岩波書店（岩波新書）、二〇二四年。
- (2) 同上。
- (3) Felix Wiedemann: Rassenmutter und Rebellin. Hexenbilder in Romantik, völkischer Bewegung, Neuidentium und Feminismus. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2007, S. 34-116.
- (4) シュトルムのテクストは以下を使用。Theodor Storm: Sämtliche Werke in vier Bänden. Hg. von Karl Ernst Lange und Dieter Lohmeier. Bd. 1: Gedichte, Novellen 1848-1867. Hg. von Dieter Lohmeier. Bd. 2: Novellen 1867-1880. Hg. von Karl Ernst Laage. Bd. 3: Novellen 1881-1888. Hg. von Karl Ernst Laage. Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker Verlag, 1987, 1988. 引用の際は括弧内に巻号とページ数のみを示す。なお本論文の執筆にあたっては以下の名作集を参照し、翻訳の際にも参考にした。シュトルム名作集Ⅰ〜Ⅳ、日本シュトルム協会編訳、三元社、二〇〇九〜二〇一一年。
- (5) シルビア・フェデリーチ（小田原琳、後藤あゆみ訳）『キャリバンと魔女——資本主義に抗する女性の身体』、以文社、二〇一七年。（Silvia Federici: Caliban and the Witch: Women, the Body and Primitive Accumulation. Brooklyn, NY: Autonomedia, 2004.）
- (6) 同上、一六頁。
- (7) 上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、二〇〇九年（初版一九九〇年）、第一章、第二章（八―三七頁）を参照。

- (8) Louise Otto-Peters: Das Recht der Frauen auf Erwerb. Blicke auf das Frauenleben der Gegenwart. Berlin: Hofenberg 2015.
- (9) Storm Bd. 2, S.971f.
- (10) Storm Bd. 2, S. 997f.
- (11) Brydie Kosmina: Feminist afterlives of the wicth: popular culture, memory, activism. Palgrave Macmillan, 2023. (Palgrave studies in (re)presenting gender)
- (12) ビートと同様の指摘がある。Louis Gerrekens, Valérie Leyh, Eckart Pastor(Hg.): Konventionen und Tabubrüche. Theodor Storm als widerspenstiger Erfolgsautor des deutschen Realismus. (Husumer Beiträge zur Storm-Forschung. Band 12) Berlin: Erich Schmidt Verlag, 2019, S. 7f.
- (13) Louis Gerrekens, Valérie Leyh, Eckart Pastor(Hg.) 2019. 上記境界を行き来する人物像については以下で分析される。
- Heinrich Detering: Kuchenesser und Rattenkönig. Theodor Storms Außenseiter-Porträts 1870/1871. In: Ebd., S. 67-84.
- (14) シュテールンによる男性像が典型的な男らしきの枠組みから外れていることは以下で分析される。Peter Küng: Die Krise der liberalen Anthropologie in der Literatur des Bürgerlichen Realismus. Männlichkeit, Bürgerlichkeit und Individualität bei Theodor Storm, Theodor Fontane und Paul Heyse. Würzburg: Königshausen & Neumann 2015, S. 175ff.

* 本研究は、科学研究費補助金 (24K03772) の助成を受けたものである。